
S & H 青い鳥

おとぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S & H 青い鳥

【Nコード】

N 3 4 9 6 B

【作者名】

おとぎ

【あらすじ】

主人公の琴吹祭がドタバタと回りに振り回されていくストーリーです。

始まりは唐突に？

拝啓 母さんへ

四月になり、桜の季節がまたやってきましたね。

俺は元気でやってます。

昨年は何事もなく、無事二年生に進級できました。

母さんも仕事が大変ですよ？体調管理も気を付けて下さい。

天国の父さんも向こうで元気よくしてるかな？

だったらいいな。

仕送だけでなく、たまには顔を見せてくれるとあんしんできます。

p s

近日、引越したはずの菜之花さんの家がまた帰ってくるんだって！

祭より

「ふう、こんな感じでいいかな」

始めまして

琴吹 祭といいます。

ともしひあか
灯丘高校二年の男子高校生です。

明日から新学期が始まるということで昨年の報告を兼ねて、母さんに手紙を書いていたところです。

「ふあ~~~~」

大きな欠伸がでた。

一段落着いたし眠くなってきたかな……

まだ春とはいえ、寒いし

おやすみなさい……

ブ、ブ、ブブブブ

ブ、ブ、ブブブブ

ん？うるさいな。

机の上にある携帯を見るとランプが点滅していた。

電話か、誰からだ？

手に取って開いてみると

『美^{みや}八』と画面には表示されていた。

「もしもし」

「やつほゝ 祭

なんか暇な声ね

そつね 今からこの私が行って上げるわ

喜びなさい泣きなさい 歓喜を上げなさい」

「いや、ちよっ 今日は」

ツツツ

き、きりやがった……

。 たった今電話を切った奴は昔からの幼馴染みで、名は「友井^{ともい} 美八^{みや}」

かの有名な友井財閥のご令嬢で、

どうして知り合ったのかは……すみません 忘れしました。

男勝りな性格なうえに、何かとよく俺に絡んで来る。

ドン ドン ドン

噂をすればなんとやら…… 早速やって来たらしい。

家にはチャイムと言うものがあるのに

ドン ドン！

「今すぐ行くよ」

ガチャ

ドアを開ければ、やはり みやが立っていた。

「あら ご機嫌用 祭」

途端何もいわず、ずかずかと家に入り込んできた。

なんだ？急に

「ちょっ どうしたんだよ」

慌てて後を追うと

みやはすでにソファでくつろいでおり、煎餅を食べながらテレビを眺めていた。

「祭 お茶」

「はあ？」

「だ・か・ら お茶」

家に来たと思ったら、すぐ これだからな

お嬢さんの考えていることは理解できん
とか

考えてつつも、しっかりお茶を準備している俺って立場弱

「あいよ」

湯飲みに入ったお茶を近くのテーブルに置いてやる

みやはそれを手にとり、飲み干すと

って、それ、かなり熱いはずなんですけど？

「祭 優のこと覚えてる？」

美八はテレビを視えていると思ったら、急にこちらに正面を向けて座っていた

「まあな 古い付き合いだったしな
今度またこちらに引越してくるんだろ？」

また、優に会えるなら嬉しいな
急に引越したから、御別れの挨拶もしてないし…

「そうね 彼……」

まあいいわ 今日 こちらに来ることになってるから」

ん？祐が家に来るってことか？

「久しぶりに会っな」

あいつ かつこ良くなってんかな？みやは会ったんだろ？」

「……彼 実は」

ピンポン

みやが何か言いかけていたが、それはチャイムによって遮られた。

「噂をすればなんとやら、もう来たのか？」

「かもしれないわね」

「ちょっと 行ってくる」

玄関に向かい

このドアを開けたら祐がいると考えると妙に気分が浮かれた。
俺達、互いに仲良かったからな

ガチャン

「お久しぶりだね」

「えーっと、どちらさんでしょうか？」

優と思つて玄関のドアを開けてみれば、知らない女性の方がたつていた。

肩を軽く覆うくらいの黒髪のセミロング、モデル顔負けの華奢な体つき

爽やかな笑顔はまるで天使を象徴するかのごとく、声もそれに釣り合うかのように洗練されたものだった。

「私は 『俺』つて言ったほうがわかるかな？」

今時オレオレ詐欺ですか？しかも電話じゃなくて直接乗り込んでくるという。

でもこんな綺麗な人が

「てい」

ガン！

急に後頭部に激痛が走った

「いつてゝ！！」

反射的に頭を押さえてうずくまる

後ろを見ればお盆を装備した、みやが立っていた。

「角で叩くことないだろ！！みや！！！」

「鼻を伸ばしている あんたが悪いのよ」

みやさん なんかとゝゝつても機嫌が悪そうに見えるのは気のせいですか？

「二人とも落ち着いて」

「あつ 優？ 久しぶりね」

優？どこだ？

キヨロ キヨロとあたりを見回すが何処にもいない

「どこ見てんのよ 前 前」

「久しぶりゝ祭」

「ぬおおお痛つて」

「ちよつとは落ち着きなさい」

美八の方を見ると、冷たい目線でこちらを見てきた

「はい」

「優 狭いけど中入ってちょうだい」

「おじゃまします」

「どうぞ どうぞ 狭いけど気にしないで」

そのまま美八と優は家の中へ入っていった。

俺一人玄関に残されているわけだが

って ここ俺ちだがな！！

始まりは唐突に？（後書き）

この小説を書くにいたっては気分です。

あしからず

少しでもみなさんに喜んでいただけたらな〜と思ってます。

今ではすでに…

先のやり取りのあと 家の中へ入った俺たち一向

マジマジと観るが本当に優なのか？

目の前にいるのは美少女。

それにあいつは男だったはずだが…

ゴクッ…

胸なんかとくに…

「祭 ジロジロ観すぎ」

気が付けば観耶が軽蔑の目線で此方を見ていた。

「本当 男っていやらしいわね」

「ち、違っぞ

ただ見ていただけだ」

そっだ そっだ

「あはは はは あまり気にしてないからいいよ…」

と言いつつも顔は少し朱がさしていた。

「で 本当に優なのか？」

「そうだよ」

俺の問掛けにコクリと頷く

「でも お前 昔は男だったじゃ
」

「ストップ！ そこからは私が話すわ」

俺が全てをいい終わる前に美八^{みや}に規制された

「優はね 実は女の子だったの」

「どうこと？」

「見掛け（外見上）は男の子だったけど、内面つまり性別的には女の子だったわけ」

「……そうなのか？」

「今まではそのための手術をするために越していたってこと」

美八が優の方にチラッと目線を送る。

黙ってコクリと優は頷いた。

「じゃあ

優は女の子だったってことなのか…

しかし、こんなに綺麗になって帰ってくるとわ…」

改めてみると

容姿は華麗にして

顔は整っており、多少は昔の面影があるが…

どこからどうみてもモデル負けの姿だった。

「あまり褒めないでね…

その、まだなれてないから…」

そうやって恥ずかしがるところなんて…

初々しいぞ…

「祭 涎…」

「あ…」

うわー！汚ねー！しかも恥ずかしい！

ゴゴゴゴゴゴゴ

な、なんだ？

「へえ」

わたくしの前

いえ、わたくしがいるのに良くそんな醜態みせられるわね」

ニコニコとした観耶がこちらを見ていた。

観耶さを顔は笑っているけど、目が…

その、笑ってませんよ？

「ま、待て！俺は何もしてないぞ。な、なあ？優」

「え？ええ、そうだね」

急に振られたからなのか、優まで慌てている。

「あははは、問題解決 一件落着」

「あははは 何が『問題解決 一件落着』よ！！」

ぶおん！！

会話の終わりとともに、物凄いスピードのボディプロ が炸裂した。

そんなのを喰らった俺は意識を保っていられるわけがなく、

「み、美八

又腕を上げたな…」

そのまま、地面に蹲り意識は闇の底へと沈でゆく…

「み、美八？

そんなことして大丈夫なの？」

「これくらいじゃ死なないわよ」

「泡吹いているけど？」

「……」

「美八のそういう所は、昔から変わらないね」

「ふん、ほつといてよー！」

今ではすでに…（後書き）

最近寒々と思える日々で…

引きこもりがちな ついこのごろ

紹介でしょうか？

「始めまして 神花 祐 と申します」

ちよつとした自己紹介と共に一人の少女が挨拶をした。

姿勢正しく礼をする姿はどこか清楚だった。

学校が始まり、

只今、朝のHRの途中なのだ。

昨日、俺が意識を取り戻した後祐も同じ学校に転入することが発覚（元々入るつもりで帰ってきた）し、偶然にも同じクラスになったのだ。

「祭 何考えていらつしやるのかしら？」

もちろん観耶も一緒だ…

実は、裏でこいつの力でも働いているんじゃないか？

校長を脅したり、校長を脅したりとか、校長を脅したりとか、 e t c

「祭？ すごく変なこと考えていませんか？」

「い、いえ めっそうもございません」

昔からの付き合いは

考えまでも見抜いてしまっやっかいだ。

いや恐ろしい。

「…あなたは顔に出やすいよ」

なんだと？そんなわけないな

「…お前ほどでわないわ（ボソリ）」

「なんですって！！」

俺が言ったことが氣にくわないらしく、
勢い良く立ち上がる観耶

てかよく聞こえたな…

そのせいか、椅子が後ろにぶつかり観耶の後ろでは凄いことになって
いた。

「うぎゃ〜〜！」

「あの筋肉質なアメフト部の夢藤が吹っ飛ばされたぞ！」

「夢藤〜！」

「い、いや〜！」

まあ、そんな感じだ

それにしても囁いた筈なのに、どうして聞こえているんだよ

「その二人とも！

イチャイチャしてないで黙りなさい！周りにも迷惑がかつてるのよ」

担任の千晴先生が注意してきた。

御もつともですけど、イチャついてはいません

「ああん？」

小さい子供がいたら 即泣きの形相でにらみつける 美八

美八さん その…

飯にも担任ですよ？

なにガンつけてらっしゃるのでしょうか

「ひっいー!!」

ほら先生もビビってるし
もう目がウルウルしてるし今にも泣きそうだな…

「……………まあいいですわ」

流石の観耶も担任にはさからうつことをやめ素直に席に着いた。

「うつうつ…」

ああ…

千晴先生もう崩壊寸前だな…

「先生泣かないで！」

「がんばれー!!」

もう生徒から励まされる始末

それがこうをそうしたか

涙を自分の袖で拭いて崩壊を建て直した。

パツと見教師に見えないモンな… 千晴ちゃん…

俺なんか 最初 小学生が高校に居る!? とか思ったし

「であるから、みなさん

本日から花神 祐さんと宜しくやっってくださいね」

「「「はい」「」」

ここは幼稚園かよ

時は昼食放課の最中

「ねえ 祐さん 俺とお昼でも」

「ごめんなさい」

「なら僕と」

「ごめんなさい」

先ほどから祐の周りには男共が群れをなして集まっており、どうやら断るの精一杯らしく飯を食う暇がないようだ

「なあ、祭

お前 アイツの知り合いなんだろ？」

パンを食べながら語り掛けてくる一人の男、名は「恭介」
何かと良く昼は一緒に食べる

「まあな」

「あんな美人が祭の知り合いにいたとわね」

「祐は男だったからね」なんて言えるはずもなく、「あはは」と笑い顔で誤魔化した。

まあ、優里は正直かなりかわいいというより綺麗な女性に入ると思う。

そんじょその男ならほっとくはずがない。

俺は優里の状況を見てため息を軽く吐いた。

＜俺も行きたい＞じゃなくて

優里の困った顔にだ

仕方ないか…

「ごめん 恭介 ちょっと用事が」

「行つてこいよ」

なにかニヤツとしていたのは気のせいかな？

いや違うな。恭介はやたらと勘が鋭いからな。

「また 何か奢るよ」と言い、俺は男達の森に向かう。

後ろでは「玉砕してこい」などと聞こえたが、恭介のやつ、後でおぼえてやがれ…

「ごめんちよつと！」

男達の森に割り込み祐の前に行く

「じゃあ、行こうか」

祐の手を取り颯爽とこの場を去った。

後ろの方では、又しても
こんなに声が聞こえてきた。

「花神さ〜ん」

ムシムシ

「くっそ！またしても祭か！！」

ムシムシ

「幼馴染みに観耶さんというものがあらながら…」

ピタ

俺は瞬時にそいつを言ったやつの前まで行き（高速）、右ストレ
ートをおみまいしてやった。

「ぐはああああ」

「にに！？　またしても、筋肉質なアメフト部の夢藤が吹っ飛ばされたぞ！」

皆のものの出会え～出会え～」

何時の時代だよ…

「戦場に散った、夢藤の吊い合戦じゃ！」

いや、死んでないって…

「「「うおおおおお！！！！」」」

気が付けば男子一同、摘とかしていた

なんでだ！？

「祐！逃げるぞ！」

「はい？」

俺は問答無用に祐の手を取り走った

「…ここまで来れば大丈夫だろ…」

「…そうだね」

皆に終われ、屋上まで逃げてきた俺と祐

「そういえば、お礼まだだよな

さつきは、ありがとう」

「いや 良いって」

あのまま 見てみぬフリなんて出来ないからな

「でも本当ありがとう」

華麗な笑顔でいう姿は天使みたいだった。

よくよく考えると

今、屋上で俺と祐の二人きりなんだよな？

しかもベンチに寄り添って隣座りだし…

昔は男だといっても今は女の子なんだしな…

まあ、いいか

「しかし 祐はモテるよな…」

「あはは まあね」

苦笑い気味に答える祐

ただ祐を誘っただけでアレだし

「でも祭ほど、ではないよ」

俺か？このかた告白された回数も0なのにか？

「ないない」

「え！？うそ？」

俺の返答に驚いたらしく、祐は目を丸くしていた。

「あのな、それは俺に対する嫌味か？」

「ち、違うよ」

祭ならすでに付き合っている人でもいるのかと…」

「ないない

今まで一度もそんなことないな」

返答しつつパンを一かじりモグモグ

うん、うまい

「そ、そうか」

何やら祐の顔がご機嫌に見えるのは気のせいか？

そのまま談笑を軽くし、昼放課も終わりが近づいてきた。

「よし、そろそろ行く」

下下下下

なんだこの轟き音は？

トクトクトク

だんだんと近付いていないか？

 $\dots - T'' - T'' - T'' - T'' - T'' - T'' - T'' - T'' - T'' - T''$

俺の直感がこの場は、ヤバいと告げている。

「祐！早くこの場」

「ふえ？」

祐はまだベンチに座っていた。

ボタン！

勢い良くドアが開いた

「（ば、馬鹿な！ 誰も入れないようにカギは閉めたはずだ…）」

「祭！　美女と二人きりで屋上で昼食とは！　なによ……！」

開いたドアの前には 美八が鬼の形相で立っていた。

「違う！良くみる！祐だ！」

「ふっふっふ……」

だめだ怒りで我を忘れている。

目が攻撃色で真っ赤とかしてる……

このまま行くと観耶に殴られ俺失神のパターンだな……
どうする俺？

どうする……

1・話間で何とかする

2・逃げる

3・諦める

4・観耶に戦いを挑む

4は明らかに自殺行為だな……

1もダメ、3はやだな……

ならば、2か！

しかし、ドアの前には観耶が……

仕方ない。アレをやるか

狙いは俺だ……

ゆうはほって置いても大丈夫だろう

「観耶！あんなところに！」

空に向かって指を指す

つられて観耶も空を向く

「（しめた！）」

俺はこのスキを見逃さず

観耶の側を全力走で過ぎる

「（おっし！！）」

そう勝利に浸ったのも束の間

いや、通り過ぎたはずだ…

何で目の前にいるのだ？

まさか 縮地？

近代にそのような術をできるものがまだ居たとは…

……神様 どうしましょうか？

心の中で聞いてみる

無理！！諦めろ！！

即効で返信されてきた。

俺も男だ腹をくくろう

祐さん…後は頼みます…

「祭りいいいいい！！！」

その罵声とともに やつの拳が風を切る音とともに迫ってきた

渾身の一撃とは、まさにこんなやつなのでしょうか？

「ぐはぁ！」

またしても視界は暗闇へと行くおれ

そのあと

気が付いたのは放課後の保健室でした。

紹介でしょうか？（後書き）

あれよあれよと時間が過ぎてます。
これでいいのか？と思う始末
このごろおとぎです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496b/>

S & H 青い鳥

2010年12月14日18時18分発行